

売りする「上勝百貨店」の経営や小水力発電事業などもあるそうだ。さらにワンコイン(500円)の乗合タクシーが生まれたり、古民家を活用したシェアカフェが開店したり、地元の茶葉を生産販売する組合が誕生するなど、次の世代を担う人たちが確かに育ってきている。

(4)葉っぱが暮らしを変える

高齢者や女性達に仕事ができただけで出番と役割ができ、住民も元気になり、町の雰囲気も明るくなった。「葉っぱビジネス」の仕事が忙しくなってきたため、老人ホームの利用者数が減り、町営の老人ホームはなくなった。「忙しゅうて、病気になつとれんわ!」というおばあちゃんもいるほどだ。いざいざ事業の成功が住民に自信を与え、生き方や暮らしを変えている。5年か10年先にも再び訪れ成長ぶりを見たい。

3. 鹿児島県鹿屋市串良町柳谷集落(やねだん)

行政に頼らないむらづくりの成功例である、鹿児島県鹿屋市串良町上小原「柳谷(やねだん)」を訪問した。やねだんとは柳谷の地元での呼び名である。鹿児島空港から車で1時間半の距離にあり、大隅半島の肝属平野の中心にあり、桜島を正面に仰ぐ豊かな農村部の集落だ。やねだんも、1995年までは、地方都市のどこにでもあつた過疎化が深刻な村のひとつだった。地区の人口は328人(平成8年当時)、高齢化率は31%。そんなやねだんは、1996年、豊重哲郎氏が柳谷自治公民館長に就任してからは大きく変化した。

豊重氏の館長就任10年目の2005年には、住民の自主財源が約500万円となり、122世帯の全世帯に対して、1世帯1万円のボーナスを支給できた。さらには、減り続けていた人口が2007年には増加に転じた。やねだんの成功のポイントは3点ある。それは(1)「住民自治」、(2)「自主財源確保」、(3)「社会的還元」である。

(1)住民自治

まず「住民自治」とは行政に頼らない地域おこしだ。集落の一人ひとりがレギュラーで、「やねだんには補欠はいない」という豊重氏の言葉もそれを意味している。

公民館長に就任した当初、民間でんぷん工場の跡地であつた町有地は雑草が生い茂る荒地だった。この場所を「むらづくり」活動の拠点にしたいという思いから、心も体もわくわくする「わくわく運動遊園」の建設がはじまつた。約300人の住民は丸太や角材、緑化樹などの資材を提供し、工事は集落の大工や左官、造園等の経験者を中心に行つた。業者に発注したのは、電気工事等のごくわずかで済んだ。労力奉仕のできないお年寄りの方からの寄付もあり、最終的には約8万円の予算で2年間かけて1998年に完成させた。その場所は土着菌センター、お宝歴史館、未来館、噴水、風力発電、運動遊具などが作られ、やねだんの過去、現在、未来が分かる場所にもなつている。

▼豊重哲郎氏



▼「わくわく運動遊園」



(ともに平成29年10月3日筆者撮影)

(2)自主財源の確保

行政に頼らない地域再生を目指すためには「自主財源確保」が必須となる。1998年に豊重氏が着手したのは集落の休遊地30アールの畑でのサツマイモ栽培だ。農作業の担い手は高校生で、初年度に35万円の収益金をあげた。この高校生からスタートした「からいも生産活動」は、後に住民総出の活動になり、年々拡大し、2002年度は1ヘクタールの栽培に到達し、約80万円の収益金をあげた。

この「からいも生産活動」は焼酎「やねだん」の生産につながることになる。地域の問題として畜産による糞尿悪臭があつたが、土着菌を混入した堆肥から生産された飼料を家畜が食べると悪臭が軽減されることで解決できた。2000年から土着菌堆肥に取り組み、からいもを育て、

芋焼酎「やねだん」が2004年に誕生した。

(3)社会的還元

自主財源を稼ぐ活動は様々なアイデアを生み出し、やがて住民総出で行う活動となつていった。得た資金を住民に還元する方法も実にユニークだ。一つは、土着菌や焼酎の売り上げ、視察の増加などで、2005年度には500万円近い余剰金が出た。その結果、全世帯にボーナスとして1万円を還元した。さらに即物的な還元ばかりでなく、学校での勉強についていけない子どもたちのために、退職された教員を招いて「寺子屋」を開く。一人暮らしの高齢者の孤独な夜の不安を解消するために、緊急警報装置を設置する等の社会的還元も忘れない。地域で自治を行い、地域の人の必要なことを行うためにも、行政に頼らず自主財源を稼ぐことが必要であることを豊重氏は強調する。

▼柳谷(やねだん)自治公民館



(平成29年10月3日筆者撮影)

(4)交流人口

新たに人が流入して来なくなると、地域社会は高齢化と人口減少の悪循環に苛まれることになり活気も失われがちだ。やねだんでも空き家が増えている。しかし、空き家も地域資源と考えて、これらを修繕して、「迎賓館」と呼び、むらに活気を与えてくれる芸術家を招致している。

2007年にはアーティストが「迎賓館」を賃貸し始め、今日では陶芸家、画家、彫刻家など多数が暮らすようになっている。豊重氏にご紹介して頂いたのは、牛小屋を改造してギャラリー&Cafeにした彫刻家中尾昶氏であつた。やねだんは、集落全体が美術館及び工房になっているようなもので、いろいろなところで作品を目にすることが可能である。

また、各地で活躍できる地域再生リーダーを

養成するために2007年以降「故郷創世塾」を年2回開催している。イベントマンではない地域経営者を養成するために始めた養成塾も第1回は9名の受講者だったが、20回目は58名と、回を重ねるごとに増えて、この10年で計800名を超えている。

(5)社会貢献

最後に、やねだんの社会貢献について紹介しておきたい。東日本大震災の際に、被災地では、運搬車が足りないとの話を聞いて軽ワゴン車を購入した。この車を子どもの送迎や学習教材の運搬などに活躍してもらおうと「やねだん号」として、合計4台被災地に送つたそうだ。さらに、高校生達に被災地ボランティアを体験させるべく3泊4日の旅を夏休みに提供した。費用50万円は総会で満場一致で認められたと聞いている。ボランティアの高校生達による被災地体験報告がやねだんの人のためにされた。このような発想力と実行力のある地域がやねだんなのである。

4. おわりに

徳島県上勝町の葉っぱビジネス、鹿児島県のやねだんの活動。それぞれユニークな活動は、すぐれたリーダー達に導かれて成功を収めてきた。地域的には、上勝町は山村の小さな村、そしてやねだんは、農村部と地理的条件は異なっている。しかし、住民の一人ひとりの出番、役割を引き出して、採算に合ったコミュニティビジネスモデルを作り上げていることは共通している。また、交流人口をうまく活用していることも見逃せない。都市部の人たちにとっては、羨ましい限りかもしれないが、いきいきとした住民の姿を都市部コミュニティでも見たいものである。

<参考文献> (以下URLは平成29年10月24日現在)
株式会社いざいホームページ <http://www.irodori.co.jp/>
『そうだ、葉っぱを売ろう!』横石知二著 SBクリエイティブ、2007年8月
やねだんオフィシャルWebサイト <http://www.yanedan.com/>
『地域再生-行政に頼らない「むら」おこし』豊重哲郎著 あさんてさーな、2004年11月